

「言葉の重み」と「心の引力」



後藤 健市 (ごとう けんいち)

場所文化プロデューサー(地域活性化伝道師)・場所文化機構代表

1959年帯広市生まれ。米国に留学中に、ベンチャー企業(東京)にチーフディレクターとして参加し、国内家電メーカーのセールスプロモーションを担当。86年に地元・帯広に戻り、社会福祉事業に携わりながら、同時に地域づくりに取り組み、北の屋台(帯広)、フィールドカフェ(十勝)、場所文化フォーラム(東京)、とかちの…(東京)、にっぽんの…(東京)などの立上げや運営、食をテーマに地域活性化に取り組む会社設立等に関わる。現在も、全国各地を飛び回り、地域づくりの講演、企画・提案、実践を行っている。

おはよう、こんにちは、こんばんは、おやすみ。誰かに会ったとき、別れるときに私たちは言葉を交わす。それは、相手に対する思いや自分の気持ち・考えを伝える手段であり、話す以外にも、書くなどの行為をすることによって言葉による情報伝達を行っている。

言葉の発達

人類は樹上生活で獲得した立体視と嗅覚によって脳の新たな発達を得た後に、草原に降り立ちさらなる進化の旅に出た。そして、他生物との過酷な戦いを通し、人の集団である「社会」という武器を身に付け、社会という「集団」は、「叫び」「うなり」を変化させ「言葉」という情報伝達手段を生み出した。言葉は「生命」を守る手段としての「集団」維持の重要な役割を担いながら、その中で果てしない「進化」を繰り返し、さらに「集団」が大きくなるたびに「情報」が増え、同時に「言葉」の機能も強化されてきた。

しかし「言語」は今もまだ発達段階にあり、だからこそ私たちは言葉が人と人の情報伝達手段でしかないという原点に戻ることが必要である。そして、情報が溢れている今こそ、「伝えられることの幸せ」を実感する「道具」としての言葉の再認識が求められている。

これは、私が人生の師と仰ぐ人物から教えていただいたことだが、最近特に、不完全である言葉への過信や言葉による人間の迷走ぶりが目立ってきている。

心の引力とメールの功罪

前述によれば、言葉はまだ発達段階にあるということだが、同時に社会に欠かすことができない重要なものである。そして、私たちはその言葉の中になぜか重さを感じている。重さとは一般的には重量のことであり引力(重力)の作用で生じるものだが、言葉は物とは異なり地球の引力とは関係しない。しかし、人が語る言葉を聴いていると、確かに重い軽いが感じられる。それは地球の引力ではなく、その言葉を発する人の「心」が持つ引力の作用であり、それが言葉に重さを生じさせているのだと私は考えている。

インターネットや携帯電話のメールの普及によっ

て、言葉のやりとりの量は増加の一途をたどっており、受発信の速度も飛躍的に向上している。ますます便利になっているが、その結果として、人と人が交わす言葉、さらには情報そのものが軽量化し、同時に人と人の関係も薄まっている。言い換えると、心の引力が低下してきたということだろう。情報伝達の便利さと引き換えに、私たちは人間がもっと大切にしなければならない「心」に関する大切な何かを失ってきているが、私たちはそのことの重大さにまだ気づいていない。

言葉の変化

リアリィ (Really) ? という英語表現を習ったとき、会話の中でいちいち「それは本当ですか？」と聞き返すのは失礼だと子供心に感じた。当時の大人たちはそんな失礼な言葉を使っていなかったが、若者の会話には徐々にその傾向が表れ、「マジ？」という言葉がいつの間にか定着し、今では、大人たちの会話に「そうですか」の代わりに「本当ですか」が使われるようになった。もちろん、真偽を確認するためでないことは相手も承知しているので、失礼だとは誰も感じていないが、言葉の軽量化はますます進んでいる。

1次という言葉の重み

最近、私が気になっているのは「6次産業」という言葉の使われ方。これは農林水産業の価値を高めるための素晴らしい提案であり、もともとは1と2と3を足して6であったのに、この言葉を使う多くの人が勝手に「掛けても」を付け加えたようである。その人たちは足し算より高度な計算である「掛け算だから」いいと思っているのかもしれないが、掛け算の1と足し算の1は役割が全く異なる。言葉の揚げ足を取るつもりはないが、無意識のうちに1の存在を軽視していることにこそ、地域が抱えているさまざまな課題の根本原因が眠っていると私は思う。産業分類にはいろいろな考え方があるが、ペティ=クラークの法則によると、1次産業は農林水産業、2次産業は製造・建設、工業生産、加工業などで、3次産業は情報通信、金融、運輸、小売、サービス業などと大別され、経済発展によっ

て1次産業から2次産業、3次産業へと産業がシフトするとしているが、数字が高くなる方が高度化しているという意識が私たちの心のどこかに存在しているのではないか。口では1次産業が大切といいながらも、無意識のうちに低くみていて「多い」「高い」が豊かになるという20世紀型の成長神話の呪縛から抜け出られていない。例えが飛躍するが、順位としての1・2・3は数字が多いほど下位となり、足したり掛けたりはしない。もちろん、競争と産業を一緒には語れないが、産業における数字の意味を改めて考えてみることも必要だろう。第1次産業の「1」は、地球、そして地域にとって“一番”身近な産業であり、同時に“一番”大切な産業であるということだと私は理解している。

言論の府がなすべきこと

私たちが日常の中で何気なく使っている言葉を振り返り、その重みを今一度真剣に考えてみる必要があるのだと思う。

改めて書くまでもないが、民主主義は言論の自由がベースにあり、その上で日本は議会制民主主義を実施している。その日本の政治を司る国会や地方議会は、かつて「言論の府」と呼ばれた。それは、議場が、国民・市民に選ばれた議員が一堂に会し、とことん議論を交わす場であるということの意味しているが、最近では多数決だけが優先される議会運営がなされ、議論がないがしろにしたまま物事が決められている。

どんなに優秀な人であっても間違いは犯す。だからこそ、少数意見にも耳を傾け、その言葉の中に潜んでいる真実や今後の可能性を受け止め、よりよい方向に向けた判断を下していくことが重要である。

日本には「言霊」という言葉があるが、自分が発する一つ一つの言葉の重みをさらにしっかりと考え、心の引力を強化していくことが、人と人の絆を強化し、コミュニティ活性化、ひいては日本再生につながっていくのだと私は考えている。